

Title	表紙 目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.9 (1966. 9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660901--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

大来佐武郎著『アジアの中の日本経済』……………	深海博明	109
西村孝夫著『インド木綿工業史』……………	三宅昱子	110
越智武臣著『近代英国の起源』……………	安元稔	111
天川潤次郎著『デフォー研究——資本主義 経済思想の源流』……………	原田敏彦	112
J. D. チェンバース著『世界の工場——イギリス経済史 宮崎肇一・米川伸一訳 1820-1880』……………	栗本慎一郎	113

産業社会学の動向とその課題

青 沼 吉 松

一 産業社会学の成立とその動向

社会学者と経済学者がほぼ同じような対象を取り上げて、それをそれぞれ独自の角度から分析した典型的事例として、
業論におけるエミール・デュルケームとアダム・スミスがあげられる。前者は分業を社会連帯性の観点から問題にしたの
たいして、後者はそれを技術的な意味に限定しながらではあるが、生産力のそれから取り扱った。共通の研究対象を異な
た角度から究明することによって、両者の間には、学問的協働が見出される。このような多角的分析をまっ
て、理論は実践
に近づくことができる。

この事例にもかかわらず、経済現象への社会学的方法の適用は順調には発展しなかった。ドイツにおける経営社会学の形
成、わが国での高島善哉などによる経済社会学の提唱はあったが、それらは実りの多いものではなかった。産業社会学とい
う名称のもとでのこの研究分野の急速な発達、一九四〇年代以降のものであった。

この産業社会学の発端を開いたのは、エルトン・メイヨーによって指導されたホーソン実験の成果であった。ここでは、

産業社会学の動向とその課題